

三送会

3月8日(日)三送会があり卒業生対現役チームでの試合を行いました。当日は卒業生を中心に多くの保護者に来ていただいた他、昨年の3月までこのチームをみられていた長尾先生も自チームの練習後、駆けつけて下さいました。

多くの方に見守られながら試合を行った後、現役生から卒業生への寄せ書きや記念品の贈呈、卒業生からの言葉ももらい、賑やかに会は終了となりました。

高島高校 50 期男子バスケットボール部のみなさん、保護者の皆様、ご卒業おめでとうございます！

苦難の連続だった 50 期男子バスケットボール部

三送会で試合をやってみて、卒業学年は能力の高いメンバーが集まった力のある代だったと再認識しました。縦への突破力のあるガード陣、高確率でアウトサイドシュートを決められるシューター、ゴール下で身体を張れるインサイドのプレーヤー。各ポジションに力のある選手がいて、三送会でも引退後のブランクを感じさせないエネルギーなプレーを見せてくれました。

ただ、彼らが最上級学年として過ごした 1 年間は多くの苦難の連続でもありました。

その中でも中心選手にケガが重なったことは大きな痛手でした。キャプテン、部長といったチームの核になるプレーヤーが長期離脱を余儀なくされ、チームとしてベストメンバーが組めない期間が長く続きました。

結果として試合結果も振るわず、U18 リーグ戦では初戦の九段中等戦では 1 点差、第 2 戦の共栄学園戦ではオーバータイムの末に敗れるなど、競った展開で勝ち切れない試合が続きます。その後迎えた、秋の新人戦第 4 支部大会でもチームとしてまとまり切れないまま 3 回戦で敗退し、3 年間続いた新人戦本大会を逃してしまいます。

3 月の交換大会であるコアラカップでは後に関東大会に出場する大崎高校に迫るなどポテンシャルを見せるものの、4 月の関東大会予選では 4 回戦の國學院戦で敗退となり都ベスト 64 にとどまります。

土壇場で見せた高島プライド

近年の Silver Bullets は秋の新人戦、春の関東大会予選、夏の総体予選の 3 大会で都ベスト 32 (新人戦については都ベスト 40) に一度も入れないというシーズンはありませんでした。

しかし 50 期の代は 2 大会を終えて、一度もそこまで駒を進めておらず、最後の総体予選は Silver Bullets の伝統をつなぐためにも絶対に負けられない大会でした。

プレッシャーのかかる総体予選、ここまでケガでそろわなかった最上級生のコンディションも整ったことで秋以降初めて万全なチーム状態で大会に臨み、順調に 4 回戦まで駒を進めます。

勝てば都ベスト 32 が決まる 4 回戦、相手は支部選抜選手 2 人を擁し、新人戦では支部大会でベスト 4 に入るなど好成績の残してきている昭和高校です。この試合における 3 年生の気持ちのこもったアツいプレーを私は生涯忘れることはありません。下馬評では不利と思われた Silver Bullets は立ち上がりから凄まじい集中力で 2 桁リードを奪うと、第 4Q に相手の反撃で一時逆転されるも、決して気持ちを切らすことなく、再逆転の末勝利します。「何が何でもこの試合に勝つんだ！」という強い気持ちが勝利を呼び込んだ、高校バスケットの醍醐味が詰まった素晴らしいゲームをものにして、最後の最後で都ベスト 32 に入ることができました。

卒業生への想い

50 期の男バスは多くの人から応援されていたチームでした。三送会に多くの保護者の方のみならず、前任の長尾先生も駆けつけて下さったように多くの人から気にかけてもらい、愛されていました。前述した総体予選の昭和戦でも多くの本校生徒に加えて、担任を中心に先生方も応援に来て下さいました。そうした方々の後押しが土壇場での彼らの頑張りを生み、記憶に残るアツい試合につながりました。

私にとってもそれは例外ではなく、本校に異動して初めて 1 シーズン一緒に過ごすことができ、最後はこのチームのヘッドコーチとしてともに戦うことが出来た彼らはとても思い入れの強い代です。

Silver Bullets は常に私の生活の中心であり、彼らの一挙手一投足がとても大きな刺激として感情を動かしますが、50 期の代についても、チームがうまくかみ合わなかったり、選手が持っている力を発揮できないような状況を目の当たりにするととんでもなく落ち込み、選手が努力の末成長した姿を見せてくれた時には大きな喜びにつつまれ、その結果として大会で素晴らしいゲームができれば心震えるような感動を味わいました。それだけ私に本気の喜怒哀楽を与えてくれた部員たちには本当に感謝しています。

あるバスケットボールの名将が選手との関係について、「コーチの片想い」と表現しているのを見たことがあります。三送会で集まった卒業生を見て改めてその表現が私にとってもしっくりくると感じました。

たとえ卒業しても、私にとってはいつまでも可愛くてたまらない生徒たちが、それぞれの道で多くの人から愛され、自分らしく輝いて欲しいと切に願っています。